

国際交流

平成 9 年 9 月 30 日 創刊
 平成 26 年 11 月 30 日 発行 (第 34 号)
 二松学舎大学国際交流センター
 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16
 Tel: 03-3261-5751

◆目 次◆

エトヴェシュ・ロラード大学(ハンガリー)と交流協定締結！…………… 1	平成26年度夏期オーストラリア語学研修実施報告
平成26年度春 semester 交流会実施報告 …………… 2	国際政治経済学部 3 年 大川 達也 …………… 4
海外協定校教職員相互訪問制度に基づく教職員の来訪 …………… 2	交換留学生留学修了報告
派遣留学修了報告	北京大学 劉 千里…………… 6
文学部 3 年 村瀬 ゆう (成均館大学校派遣) …………… 3	中国文化大学 涂 智宇…………… 6
文学部 3 年 和田 彩芽 (成均館大学校派遣) …………… 3	中国文化大学 梁 荳翔…………… 7
平成26年度夏期中国語歴史文化研修実施報告	平成26年度 交換留学制度…………… 8
文学部 2 年 岩永 侑希 …………… 4	国際交流センターからのお知らせ…………… 8

エトヴェシュ・ロラード大学 (ハンガリー) と交流協定締結！

平成26年9月16日(火)から21日(日)の6日間、渡辺和則学長・海外講座企画推進室長の山辺進特命教授・国際交流センター事務室の小西明德室長がハンガリーの首都ブダペストを訪れ、19日(金)に本学とハンガリー国立エトヴェシュ・ロラード大学の間で交流協定等が締結されました。締結された協定等は次のとおりです。

- 二松学舎大学とハンガリー国立エトヴェシュ・ロラード大学との交流協定
- 二松学舎大学文学研究科とハンガリー国立エトヴェシュ・ロラード大学人文学部東アジア研究所の学生交流プログラムに関する合意書
- 二松学舎大学東アジア学術総合研究所とハンガリー国立エトヴェシュ・ロラード大学人文学部東アジア研究所の海外

協定プロジェクトに関する合意書

これまで本学東アジア学術総合研究所が、現地にて集中講義等を行ってききましたが、本協定締結により、今後は本学とエトヴェシュ・ロラード大学との間で、海外講座の更なる展開・両大学にある諸機関の交流・教職員及び学生の交流(交換留学を含む)・共同研究等を推進していくこととなります。

エトヴェシュ・ロラード大学について

エトヴェシュ・ロラード大学は、1635年に創立された歴史ある大学です。人文学部東アジア研究所では、多くの学生が「日本」を学問研究の対象として捉え、積極的に日本の言語・歴史・文化・文学・政治及び経済を学ぼうとしています。



協定書を取り交わす渡辺学長とガーボル副学長



エトヴェシュ・ロラード大学



ブダペストの街並とドナウ川



協定締結

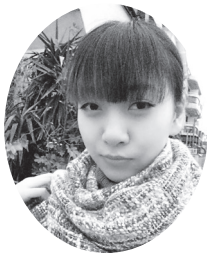
平成26年度 春セメスター交流会実施報告

二松学舎大学では、国際交流や日本の歴史・文化・自然に触れることを目的に、留学生参加の交流会を行っています。本年度の留学生交流会は、7月12日（土）に実施され、北京大学（中国）や中国文化大学（台湾）からの交換留学生を含む15名の留学生と14名の国際交流サポーター（国際交流に興味がある学生ボランティア）、引率教職員3名が参加しました。

午前中は、九段1号館から歩いて20分ほどの国立劇場を訪れ、歌舞伎鑑賞教室に参加、午後は大学の13階ラウンジでの昼食懇親会を行いました。

素晴らしい歌舞伎鑑賞

国際政治経済学部 国際政治経済学科2年 韓 遠蘭



平成26年7月12日に歌舞伎鑑賞と昼食会の交流会が行われました。30度ほどの気温ではありましたが、先生たちと学生たちは夏の暑さと戦い、不滅情熱を持って、出発しました。皆でしゃべったり、笑ったりしながら、大学から徒歩で国立劇場の

歌舞伎鑑賞教室に行きました。私は歌舞伎を一度も見たことがなかったので、今回の鑑賞は非常に貴重な体験が出来たと思います。

歌舞伎は日本の伝統文化として、400年の長い歴史を持ち、大変魅力があります。当日見た歌舞伎のテーマは「傾城反魂香」です。「傾城反魂香」は、日本のシェイクスピアと言われる浄瑠璃作者、近松門左衛門の名作です。歌舞伎鑑賞教室で使っていた道具や効果音など、様々な舞台効果が素晴らしいと思いました。

歌舞伎の鑑賞後、皆で大学にもどって、昼食会に参加しました。13階レストランで、いろいろなドリンク類と

豊富な料理を楽しみながら交流しました。そのおかげで皆と仲良くなり、新しい友たちもできました。途中で、面白いビンゴ大会もあり、交流会の雰囲気が一気に盛り上がりました。しかし、残念ながら、私は何も当たりませんでした。友達がビンゴに当たって、すごく喜びました。羨ましかったです。何も当たらなかったけれど、皆と一緒に交流会に行って、本当に楽しかったです。また今度機会があれば、是非もう一度参加してみたいと思っています。



昼食会の風景

海外協定校教職員相互訪問制度に基づく教職員の来訪

平成26年2月26日～3月3日の日程で、北京大学歴史学系より、包茂紅教授が本学を訪問された。本学と北京大学歴史学系との海外協定校職員相互訪問制度は、平成13年度から始まり平成25年度で第12回目を迎えた。北京大学歴史学系主任の包茂紅教授は、環境史がご専門で、日本をはじめ、ドイツやフィリピンの大学での客員教授の経験もあり、理事長、学長への表敬訪問の際には、ご自身の経験も交えて和やかに歓談されていた。

恒例の記念講演は、「大寨モデル」の環境に及ぼす影響」というテーマで、中国の歴史上の政策と環境問題についての講演で、多くの学生が熱心に耳を傾けていた。



学長室にて表敬訪問

（左より劉瀟雅さん（本学留学生）、山崎副学長、包茂紅教授、渡辺学長、吉崎副学長、武永国際交流センター長）

派遣留学修了報告



韓国・成均館大学校

文学部 中国文学科3年 村瀬 ゆう

成均館大学校での約10ヶ月の留学生活を終えて振り返ってみると、とても長く、そして濃い時間だった。

入学してまだ日が浅かった5月に交換留学の試験を受けたが、ほぼ独学の知識のみでの挑戦は決して容易なものではなく、面接試験で韓国語での質疑応答が自分の思うようにできずに試験が終わって涙を流したことをよく覚えている。ハングルに興味を魅かれ、独学で勉強し始めたのは高校2年の冬だ。その時からの夢だった成均館大学留学だが、合格発表で自分が選ばれたときは正直うれしさよりも、不安の方が大きかった。

春セメスターの時点では専攻の授業までこなす自信がなく、語学堂の授業に専念することにした。3級からのスタートだったが、授業は全て韓国語で進行されるため、毎日授業についていくのに精一杯で、自分の韓国語能力の未熟さを痛感し艱難辛苦な日々だったことを思い出す。未熟さというのも、文法授業は過去に独学で勉強していた部分が多く、復習に+αするような形で受講していたが、独学ではやはりどうにもならないのが「会話」だ。この時の私は、発言して間違えたら体裁が悪いということばかりに気を取られ、授業中に発言することや会話の授業で自分の意見を言うのがとても怖かったのだ。それにも拘らず、会話の授業は毎日発表やプレゼンテーションばかりで嫌でもやらなければいけない環境、そして先生も韓国人であるため日本語での質問は当然できず、たどたどしくても「自分の韓国語」で伝えなければ前進できないという状況の中で、私は少しずつ変わることができた。外国語を上達させたいならば、自分から積極的に話すことが最も重要だということを実感したのだ。

春セメスターで無事3級、4級に合格し、秋セメスターに突入した。秋セメスターからは語学堂の授業だけではなく専攻の授業も4科目履修し、学校生活がとても忙しくなった。二松学舎大学では、1科目週に1度の授業だったが、成均館では1科目週2度制であるため、専攻科目が週に8時間というスケジュールだ。9時から15時が語学堂の授業なのだが、専攻授業が語学堂の昼食時間であり、語学堂、専攻授業、語学堂、専攻授業という毎日を送ることとなったのだ。専攻授業は韓国人学生に混ざり、同じように試験もプレゼンテーションもこなさなければならず、語学堂も5級になると討論や模擬裁判など高度な授業になり、両立が本当に辛く日本に帰りたと思う日の方がはるかに多かった。語学堂のクラスでは交

換留学で来ている学生は少なく、専攻授業がある学生は私以外にいなかったというのも正直辛い環境だったと思いつつ。中間、期末試験共に語学堂と専攻科目の試験日程が重なったり、プレゼンテーションの日程が重なったりと、両立させるのに苦心惨憺な日々だったが、専攻科目でのレジュメ発表やプレゼンテーションは大きな自信になったと考える。留学終盤には、教授に推薦されて60人の学生の前でのプレゼンテーションをやるまでに成長した。あまりの緊張に、自分の考える完璧とは程遠かったがとても良い経験になった。

今回の留学は、韓国語能力の向上は無論、多くのことを学び、また自分を成長させることができた貴重な体験だった。困窮することも多々あったが、韓国人の友人達との交流で現地の生きた韓国語を学ぶこともでき、語学堂で知り合った様々な国の友人達、そして慣れない英語での会話だったが、親しくなれたルームメイトとの出会いは自分自身の視野を広げることに繋がった。外国から自国を見つめ、今まで気づくことができなかった自国の長所、そして遠く離れた場所で1人で生活をしてきたことで、応援してくれていた家族、友人の大切さを今まで以上に感じる事ができた。留学で学んだことを基盤に今後は通訳案内士の取得に向けて一層奮励努力したい。



クラスメイトと（筆者・左）



韓国・成均館大学校

文学部 中国文学科3年 和田 彩芽

「語学はツールでしかない。」この言葉の意味が留学を通し理解出来たと思う。なぜなら語学堂で学んだ事よりも正規の授業で学んだ事の方が遙かに多いからだ。もちろん語学堂で学んだ事は多くを知り、学ぶ上で基礎となる。その基礎をどう応用するかが重要であると私は考えるようになった。

私は実際に正規の授業を通し多くの発見があった。特に発見が多かった授業は道教に関する授業だった。その

中でも一番の発見は一見全く関係の無い二つの事柄が、突きつめて行くと何処かで共通していたり連鎖していたりするという事だった。つまりこの世界に起こる全ての事は何かしら影響しあっているという事だ。この発見は私の留学において一番価値のある事だったと考える。

そしてもう一つは物事を断片的に見ていては、その本質を見抜けないのだという事だ。これは一年生の時にもある教授が言っていたのだが、その時はこの言葉の真意を考える事もせず、ただ言葉としてしか見ていなかった。だが自分が様々な経験をしていく中で痛感していった。

留学中の出来事を振り返れば確かに大変だった事の方が多かったと思う。だがマイナスな記憶よりも自分の為になった事など、プラスな記憶の方がまず先に思い出される。そういった事からして私の一年間は価値の有る一年間であったと言える。そして留学も成功だったと自負

している。

これからはこれらの発見を発見で終わらせず私の人生に生かしていかなければならない。そのために更に多くの経験と知識を増やしていく必要があると考える。



語学堂3級卒業式（筆者・中央）

平成26年度 夏期中国語歴史文化研修実施報告

今年で第18回を迎えた中国語・歴史文化研修は、8月7日から8月27日の3週間の日程で海外協定校である北京大学歴史学系にて行われました。今年は文学部、国際政治経済学部から計26名の学生が参加しました。これまでも、毎年多くの学生が中国への短期留学を経験しています。



北京の思い出

文学部 中国文学科2年 岩永 侑希

実のところ、この短期海外研修に参加する前、私はあまり乗り気がしなかった。なぜなら国内でさえ三週間もの外泊をしたことが無い上、海外で過ごした経験もごくわずかで、一体どのような物事が我々を待ち受けているのか皆目見当がつかなかったからである。しかし中国語の教材で読んだ万里の長城や天安門、天壇公園などの話を思い出し、実際に行ってみてみたいというごく単純な気持ちが、私を北京へ向かわせたのであった。

成田から約四時間後、我々は北京首都国際空港に降り立った。空港内の天井は高く、通路も広々としていて、中国の広大さを垣間見たようであった。それからバスに乗り換え北京大学に到着し、特に変わったことも無くその日は終了した。宿舎内はきちんと掃除されていて、住み心地は悪くなさそうだった。

二日目から早速授業が始まった。学生たちはそれぞれ振り分けられたクラスで授業を受けるため、二松学舎大学での授業より遥かに少人数制であった。私のクラスの先生はいわゆる“おじいちゃん先生”で、とてもゆっくり話す。なにせ中国語なので初めは何を言っているのかさっぱりだったが、集中して聞いているうちに聞き取

れる単語も増え、少しずつではあったが理解できる内容が増えていった。聞き取れない、または音は聞き取れていても意味がわからないことは往々にしてあったが、それでもめげずに先生に質問をし続けていた。実は北京に来る前、私は自分の中国語に自信を無くしていた。中国語を勉強して約一年半、上達も牛の歩みで、仕事で使えるほど習熟しているわけでもなく、このまま勉強し続けても果たして意味はあるのかと自問する日々が続いた。この研修に参加すれば何か新しい発見があるかもしれないと、一縷の望みを抱いて北京にやって来たのだ。北京大学の授業や街中の会話で生きた中国語に触れ、学ぶ楽しさや面白さを改めて感じ、気に病んでも仕方の無いことで思い悩むよりも今ある状況の中で最善を尽くそうと心に決めた。二松学舎大学に入学しなければこのように



万里の長城で友人と（筆者・右）

中国語を一生懸命勉強しなかっただろうと感じ、先生方や学友にはとても感謝している。この研修を経てより一層中国語を好きになったことが、なによりの収穫であった。

また、北京の名所旧跡を実際に観光できたことも、大変嬉しかった。それまで机の上でしか勉強していなかったため、自分の目で見て、現地の空気を肌で感じる事ができ、中国に対する理解が更に深まったように思っ

た。例えば、中国語で「万里の長城に登る」は「爬长城」と言い、この「爬」は単に登るわけではなく、よじ登る、這い上がるという意味を表す。実際に登ってみると頂上までの坂や階段の傾斜が急で、手すりを掴んで必死に登ったが、日差しも強く疲れてしまい、ついに頂上に到達することはできなかった。更に中国語が上達した頃に、もう一度挑戦したい。新たな目標を与えてくれたこの研修に感謝している。

平成26年度 夏期オーストラリア語学研修実施報告

オーストラリア屈指の名門大学であるクイーンズランド大学（ブリスベン市）附属語学教育機関（ICTE-UQ）において、8月16日から9月7日までの3週間、オーストラリア語学研修が行われました。第2回目となる今回の研修には、文学部、国際政治経済学部から計20名の学生が参加しました。

夏休み！最強の刺激オーストラリア語学研修

国際政治経済学部 国際政治経済学科3年 大川 達也



私は入学したときから海外に留学してみたいと思っていました。小さいころから外国人と交流してみたい、一度は海外に行きたいという夢があったからです。二松学舎大学には中国北京大学と、オーストラリアクイーンズランド大学の語学研修制度

があります。しかし1年次、2年次まではそう思いながらも、私には持病があり病気の性質上、国外旅行はおろか国内旅行も困難なことでした。さらにホームステイは観光とは違い、現地の人と一緒に生活しなければならないのでハードルが高く、諦めていました。しかし3年次に病状が安定し主治医に相談したところ、オーストラリアのブリスベンなら私の病気にも対応できる医療機関もあり大丈夫との判断をもらい、早速国際交流センターに参加を申し出て、参加することができました。

現地に到着してみて驚いたのは、ゴールドコーストの壮大な景色で、匂い、風、目に入るものすべてが新鮮でした。クイーンズランド大学は、学内に湖があり船が走れるほど大変広く、病院や薬局も併設されており日本の大学では見ることができない光景が広がっていました。ホームステイ先ではママ（キャシー）、ママの息子、ママの妹、サウジアラビアの留学生3名（ノワフ、モハネット、バッター）との生活です。ママは初対面でも良いことはよい、ダメなことはダメとハッキリ物事を言ってくれます。率直な言葉の方が素直に受け止めることができるし、自分もハッキリYes、Noを言って良いので私には大変合っていました。

平日は英語での授業やアクティビティがありました。

最も印象に残った授業は、オーストラリアについて、以前イギリスの植民地であったという歴史、アボリジニという先住民とオーストラリアの関係性などを学んだ授業です。また、印象に残ったアクティビティはノースストラドブローグ島での観光です。美しい湖を一望したり、コアラなど多くの野生動物を見たり、そして真っ白な砂浜が延々と続くビーチで集合写真を撮ったりと、夢のような時間を過ごすことができました。そして休日にはルームメイトのノワフと一緒に映画に行ったり、ブリスベンスティ内を探検したりして有意義な時間を過ごしました。

そして生活を送っていく上で必要不可欠な英語に関しては、出発前には自分の英語は相手に通じるのか、そもそも会話になるかといった不安がありましたが、現地についていざ会話をしてみたら、現地の人私のカタコトの英語を真摯に理解しようとしてくれたので、その不安はすぐ解消されました。そして毎日英語を話していくうちに「話す」ことに自信が付き自由に会話ができました。3週間という期間がとても短く感じ、もう少し滞在したいと思いました。

各大学や高校が留学制度を設けている理由について、今まで深く考えたことはありませんでした。しかし今はその意味を知ることができたと思います。本やネットで



ゴールドコーストサーファーズパラダイスにて（筆者・中央）

知り得たとしても、実際に自分で経験することこそが自分を育てる本当の意味での生きた教育になるからではないか、また人は一期一会ですので、その時に自分は何をするのか、何ができるのか、その時をどう生きればいいのか、を考えることは、これからの人生においてとても大切なことですし、自分にとって後悔のない人生を送れるよう、人生そのものを考える一助となる、そういう観点から作られた制度であると心から感じました。国、人種、貧困、病気などに関係なく人と人は繋がっているの

だと実感しましたし、また絶対海外に行きたいと思わせてくれる語学研修でした。

ホームステイという貴重な体験ができるのは今しかないと思いますし、世界の広さを知ってもらいたいので、留学には一人でも多くの方に機会があれば是非参加してもらいたいです。

最後に私がこの研修に参加するためにサポートして下さった全ての方々に感謝致します。ありがとうございました。

交換留学生修了報告

陋室随想

中国・北京大学 劉 千里



最近、帰国が迫ってきたので、荷物をまとめ始めた。紙が散乱するワイルドななか、一人で呆然と佇んでいた。

「この一年間、なにか有意義なことをやったのか」と必死に考えたけど、まったく見当たらなかった。そ

れでもあきらめず、ずっと放置していたカメラを本の山の中から掘り出し、来日後撮った写真の一枚一枚を確認し始めた。十秒後、カメラを持った手を下ろし、「ほんと、なんの変哲もないものばかりだなあ」と思わず溜息をついた。

一番の多く映されたのはやはりあの坂道だった。初雪後の九段、桜満開の千鳥ヶ淵、夏祭りの神社、その一瞬一瞬が脳内に蘇った。二百の日々、毎日の勉強を終えて、その坂を下り、次の日またその坂を登った。時々武道館から退場した人混みに混じり、時々一人でぶらぶらと歩き、淡々と過ごした時間の中、初めて日本の生活を体感した。

このような規律正しい生活は久しぶりだった。高校を卒業してから、「廃人」同然の生活を送っていた。毎日のようにゲームやアニメに浸った数年だった。そのような暮らしに終止符を打ったのは、日本での電車通学だった。最初はつらかったけど、やがてそのペースに慣れ、それからいつの間にか自分の手帳を持ち始め、電車の中での日程確認が習慣となった。

当然ながら、異国での生活は順風満帆ではなかった。言語の壁が高いだけでなく、文化の違いも歴然としている。けど、こんな環境の中に生きているからこそ、母国で見えないものを見、普段気づかないことに気づき、そして成長する。

しかし、その時気づいた、何かが足りなかった。多

分、最近の生活があまりにもまともで、非日常の要素が欠乏しているだろう。

落ち込んでいた時、ちょうど壁に掛けたカレンダーが目に残った。「まだ一か月があるじゃないか」と喜びながら、また荷造りに戻った。



留学生交流会にて（筆者：左）

追えば追うほどその輝き増すもの

台湾・中国文化大学 涂 智宇



時間が経つのは早すぎると思う。もうすぐ一年の留学生活が終わる。今振り返ると、この一年間に、様々なことを体験できた。例えば、初めてスーツを着たり、新潟へ行ってスキーをしたり、お花見をしたりした。人生の中の、凄く大切な思い出になり、一生忘れられない。本当に心から嬉しく思っている。

日本に来る前に、多くの問題を予想しており、心配したが、全然役に立たなかった。悩んでいて心配することより、前向きな態度で問題を解決するということが、この留学生活で最初に学んだことだ。もちろん日本語も沢山勉強した。台湾では、授業でだけ日本語を話せばよいが、日本においては、授業に限らず、日常生活でも日本

語で話さなければならない。しかし、先生方だけではなく、二松学舎の学生さんは皆優しいと思う。私は恥ずかしがり屋で、知らない人に声をかけたり、話したりするのは怖い事だと思っている。その上、日本語で自分が言いたい事を言わなければならないくてどうしようもなかった。そのため、最初、友達は何れなかったが、今年から国際交流サポーターというシステムができて、沢山素晴らしい学生さんに出会って、多くの行事に参加させていただき、よかったと思った。皆さんと一緒に学校の球技大会に出たり、歌舞伎を見に行ったりして、楽しかった。

日本にいる間に、日本にいる間しかできないことをできるだけしたいと思った。そこで、思う存分にやりたいことをやらせていただいた。好きな歌手のライブも行ったし、一番やりたかったスキーもやったし、母とディズニールランドも行ったし。それに、八月の予定も多く入れたので、沢山のところに行きたいと思っている。

この一年間は本当に日本を満喫した。今回の留学生生活は私にとって、人生の中で、絶対忘れられない思い出だろう。そして、一年前の私と比べると、この輝きは一年前の私に増して、輝いているだろう。



クラスメイトと花火大会にて (筆者・左)

しかし、時間が経つのは早いもので、二、三週間も経つと、私もしだいに慣れない一人暮らしをこなし、学校もちょうど始まるころだったので、心の準備を整え、新しい生活を始めた。学校は予想と裏腹に小さかった。商業ビルみたいに狭いのだ。キャンパスも一目で収まるくらい大きさで、正直少しショックだった。

最初のころは友達もいなかったし、授業も台湾にいたときと比べたらレベルが違いすぎたので、学校が始まって間もなく、また不安になった。しかし、ある日、偶然にも派遣留学説明会で友達ができ、その友達が部長を務めるサークルに入るようになった。そのときに思いついた。友達を求めるだけではなく、チャンスは自分で作るものだと。

留学生のイベントは決して多いとは言えないが、その一つ一つが、私たちの絆をかためて、大切な思い出になった。10月の学園祭、私たち交換留学生は中国語の朗読大会の審査員として任命され、日本人皆の見事な朗読ぶりを見た。11月に、留学生皆と柏キャンパスで自分の国と留学経験を高校生たちに教えたり、バス旅行で箱根と鎌倉にも行ったりした。12月はずっと前から知らされていたスピーチコンテストに参加し、運良く一位をとれた。そして、2月に台湾の友達と一緒に夜行バスで大阪にも行った。4月になると、また新学期が始まり、私たちもいよいよ帰国へのカウントダウンを数えるのだった。

この一年では、かけがえのない思い出や大切な友達ができ、あとで振り返ってみたら懐かしいだろう。そして、三年生である以上、卒業後のことも考えないと行けないので、自分なりにいろいろ考えた。未来予想図を描くのにこの一年は、まったく足りないが、少しは方向性が見えてきた。この一年の収穫は日本語だけではなく、少しずつ子どもから大人への階段をのぼっているということだ。感謝しきれない一年、日本よ、友よ。私はこの一年を絶対に忘れない。

セカンドホームタウン

台湾・中国文化大学 梁 荳翔



人は期せずして会うのだと思う。ちょうど一年前の私はわくわくしてたまらない気持と緊張まじりの気持ちを抱えて日本へ旅立った。

人生初の一人暮らしはまさか海外だとは思わず、日本へやってきた初日に、私はもうホームシックにかかってしまった。未知なる環境、通じるかどうかもわからない日本語など、さまざまな不安要素がプレッシャーのかたまりとなり、すぐにでも台湾へ帰りたいたいという大変な時期だった。



靖国神社にて友人たちと (筆者・左から2番目)

平成26年度 交換留学制度

交換留学とは、「二松学舎大学交換留学に関する規程」に基づく、海外協定校への1年間の派遣留学です。本学では協定校のうち、中国 北京大学、韓国 成均館大学校、台湾 中国文化大学、オーストラリア シドニー工科大学、中国 浙江工商大学の5校に留学できます。協定校によって派遣条件が異なります。詳細は「海外留学の手引き2014」をご参照ください。

派遣留学生紹介 (平成26年10月～平成27年9月)

- ◆中国 北京大学 文学部 中国文学科3年 佐藤 夏華
- ◆台湾 中国文化大学 文学部 中国文学科4年 湯本 智瑛



学長、副学長、国際交流センター長と派遣及び交換留学生

交換留学生紹介 (平成26年10月～平成27年9月)

- ◆中国 北京大学
- ◆台湾 中国文化大学



銭 栖榕



許 尹馨



江 昱瑩

◆中国 浙江工商大学 (平成26年10月～平成27年3月)



張 天恩



張 万举



程 妮楠



梁 佳麗

国際交流センターからのお知らせ

国際交流センター実施予定行事

詳細は随時掲示します。

第11回外国人留学生日本語スピーチコンテスト

日程 12月6日(土) 場所 九段キャンパス1号館 中洲記念講堂

「外国人留学生日本語スピーチコンテスト」もすっかり恒例となりました。出場者の皆さんは、練習に練習を重ね、毎年様々なパフォーマンスを見せてくれます。多くの方々のご来場をお待ちしています。

国際交流年末懇親会

日程 12月6日(土) 場所 九段キャンパス13階ラウンジ

父母会の助成を受けて国際交流年末懇親会を開催しています。留学生の皆さん、楽しい時間を過ごしながら、新たな1年の抱負について語り合しましょう。

編集後記

- ◇4月に留学生交流ランチタイムを実施しました。ランチをとりながら、終始和やかなムードでの交流となりました。
- ◇8月に2名の派遣留学生が中国・北京大学、台湾・中国文化大学へとそれぞれ旅立ちました。1年後に成長して帰ってくる日を楽しみにしています。
- ◇今年度10月から新たに浙江工商大学から交換留学生の受け入れを開始しました。今年度は4名の留学生が本学で学ぶことになりました。思い出に残るような学生生活を送ってほしいと願っています。
- ◇本誌へのご意見・ご感想をお寄せください。
E-mail : icenter1@nishogakusha-u.ac.jp